

原発ゼロ

を求めて

まるで悪夢を見ているようだった。冷却不能、炉心損傷、水素爆発……。いつか事故は起こると警告してきたことが、現実となって降りかかる。テレビから流れる東京電力福島第一原発の情報に、唇を噛みしめていた。

「3・11」を振り返り、小出裕章さんは静かに話し始めた。「私は、原発をやめさせるために原子力を研究してきました。事故が起きないように、私にできることをしてきたつもりです。だからこそ、原子力の専門家として事故を防げなかったことを本当に申し訳なく思います」

故郷を追われた人々、骨と皮だけになって餓死した家畜、汚染された海と大地に思いを巡らし、悔しさと怒りをにじませる。

電力足りている

「歯医者さんで使用するセラミックのように、核燃料もセラミックで焼き固めています。2800度で溶けますが、圧力容器の耐熱性能は1500度。燃料は圧力容器に大きな穴を開けて落下し、格納容器のコンクリートの床を溶かしました。東電は、コンクリート床は30%残っていると

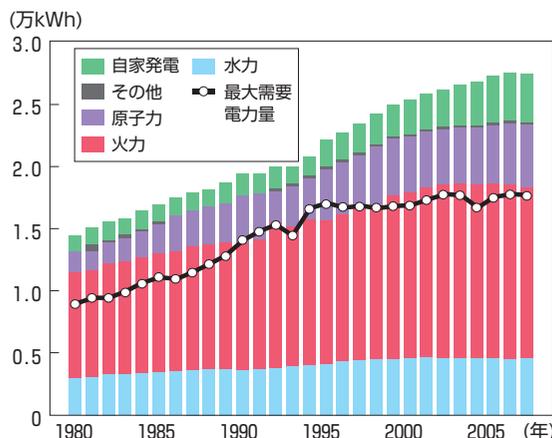
主張していますが、見たきたのかと言いたい。現場は今も手探りの状態で、事故は続いています」

「原発事故の悲惨さを目にしながら、被災者や国民を裏切るように各地の原発で再稼働の動きが加速する。過大な電力需要予測に、過小評価された電力供給量。電力会社の「試算」を基に、権力者は「計画停電を回避する」と叫び、「ウソ」と「脅し」で再稼働を決定

した。小出さんは、「停電なんか絶対しない」と強調し、パソコンでデータを示した。

「原発が生み出す電力を全て火力発電で賄ったとしても、火力発電の設備利用率は7割にしか

発電施設の設備容量と最大電力需要の推移



1990年代後半以降、最大電力が火力+水力の発電能力を超えていないことが分かる

福島第一では、「収束宣言」後も危険な状態が続いている。政府や東京電力は「安全」を強調するが、1000t体の燃料棒が保管されている4号



京都大学原子炉実験所助教

小出 裕章さん

「たとえエネルギーが足りないとしても、原子力に手を付けてはいけません」

「たどろろ」

「たどろろ」

「たどろろ」

こいで・ひろあき 1949年、東京生まれ。東北大学在学中に女川での反原発闘争に触れ、原発をやめさせる研究を続けることを決意。74年に同大学大学院博士課程修了。同年から現職。著書に『隠される原子力・核の真実』（創史社）など多数。

志ある声広げれば廃絶できる



研究室では電灯もエアコンも付けずパソコンと向き合う

「原子力ムラ」のなか

ら

「3・11」後、毎週末は講演で全国各地を飛び回る。執筆した『原発のウソ』（扶桑社新書）はベストセラーに。「不屈の研究者」として、知られるようになった。取り巻く環境は変わったが、質素な研究生活は変わらない。

「私力は圧倒的に非力です。一人ひとりの力なんて弱い、小さい。しかし、今、皆さんが自ら考え、湧き上がる思いに従って発信し、行動しています。歌っても良いし、絵を描いても良い。署名やデモに参加することも一つの手段です。できることから始めることが大切です。この志ある声が大きく広がれば、原発を廃絶させることができます、と私は思います」

「私力は圧倒的に非力です。一人ひとりの力なんて弱い、小さい。しかし、今、皆さんが自ら考え、湧き上がる思いに従って発信し、行動しています。歌っても良いし、絵を描いても良い。署名やデモに参加することも一つの手段です。できることから始めることが大切です。この志ある声が大きく広がれば、原発を廃絶させることができます、と私は思います」

気付いたリスク

1970年、原発建設で揺れていた宮城県・女川町。「原発が安全と言わなければならない。住民から投げかけられたこの問いが、当時、東北大学工学部原子核工学科の学生だった小出さんの人生を決定的に動かした。原子力の平和利用を夢見ていた青年が、初めて疑問を抱いた瞬間だった。「原発は都会では引き受けられないリスクを持っている。気付いてしまった以上は、過疎地に原発を押し付けるようなことは許せませ

「私は原発を一刻も早く廃絶させることを願って研究を続けてきました。どう生きることが興味の対象であって、ほかの人が原子力の旗を振っても関係ありませんでした。嫌がらせを受けたこと、差別されたりしたこと、一度もありません。それに、自由に研究できる今の立場が好きですか

流れが変わった

7月1日、野田政権は原発存続へ、再び舵を切った。小出さんの目には、「原発推進派が生き残りをかけて総攻撃して

「原発推進派が生き残りをかけて総攻撃して

あまきらめるわけには